

狂 嫉

乱

舞

秋本勇



その人に対する愛の形を示すなら、手段は一つ。

諦め、という最高で最悪、最強で最弱の、簡単そうで難しい方法。

昔から、既婚の年上男性を好きになった。それは、流行というものに埋没する周囲の男たちが幼く見えてしまっていたから。年上の男性は知識が豊富で、流行という言葉から抜け出したアイデンティティーを持ち、社会になじんだ香りがした。

そして何より、そんな男性たちから香る煙草の香りが好きだった。格好をつけるためにふかしているのではなく、自然とした仕草で煙草の煙を純粹に愛している姿が魅力的なのだ。今まで愛してきた男性たちは皆、愛煙家であった。

そして、今惹かれている人もまた。

長身で筋肉質の体は、それなりに身長のある私でも顔を見ようとすると少し見上げるようになってしまうくらいだ。話すとき、私が視線を上げなくてはならないことを気にしてくれているのか、少し猫背気味に上半身を曲げてくれる。そんな彼の姿を見て、気遣いのできる大人なのだと実感する。

ヘビースモーカーの彼は時折勤務中にも煙草を吸う。その姿はどんな男性よりも魅力的で、その横顔に漂う年相応の雰囲気にとどきりとする。紫煙がゆったりと吐き出される口からは、鼻にかかった低い声がある。

時折すれ違うその姿から漂う甘い香りで銘柄を当てる。きっとPeace。苦い煙の中に漂う甘い香りは、寡黙な彼が時折放つ甘い声のようで、何となくぴったりの雰囲気に少し笑った。

その香りが残る声で、帰れば奥さんと今日あったことを話すのだろう。子供と共に食卓につき、団欒しながら食事をするのだろう。会社とは違う声と表情で、楽しげに夜を過ごすのだろう。

そう思うと、いまさら慣れたことなのにほんの少し悲しくなる。

Peace それはほんの一時の優しさと甘さと平和。

いつか必ずこんな恋を終わらせてくれるような男性が現れるのを待ちながら、今は一時の優しさと思いに酔う。

その人に対する愛の形を示すなら、手段は一つ……。

## 狂創の匣の中で

---

繰り返される平凡な日常。

創り出される非凡な妄想。

匣の中は狂気じみた闇に溢れていて、私はそこでキチガイたちが足を踏みはずす瞬間を夢見るために眠る。

皆同じ制服を着て、同じ匣に詰まって同じことを学ぶ。

果てしなく続いてゆきそうな息苦しい時間。

よく耐えていられると思う。私は耐えられなかったから。

だからってこんなことするつもりじゃなかったけど、今更言たって遅いのはわかってる。

私は狂ってしまったんだ。

四十人もの人間……いや、何百人という人間を抱きかかえたこの白く統一された匣の中で集団的無意識を植えつけられているうちに精神が崩壊してしまったんだ、きっと。

なんだか急に静かになってしまった匣の中には闇が広がり始めた。私は少し冷静さを取り戻して、階段の隅に座り込んで眠った。

「大変な事件が起きました。都内の高校で大量殺戮事件です」

ヘリコプターが旋回しながら捉えた高校の校舎がテレビ画面にでかでかと映し出されるのを暗い室内で見つめていた。テレビ以外に電源が入っている電化製品といえば机の上に置かれたノートパソコンだけだ。スクリーンセーバーがせかせかと動き出すのを横目で見ていたが、その高校が映し出されたとたん喜びと驚きで俺は思わず奇声を上げた。それは、俺をこんな引きこもり生活にさせたクラスメートや教師たちがいる高校だったのだ。すでに退学している俺のことなど、皆忘れていたに違いなかったが。

ニュースの内容によると、その大量殺戮事件の犯人は女生徒で、授業中に突然教師とクラスメートたちを殺害し、生きていたものがいなくなると次々と校舎内にいた生徒たちや教師を襲い始めたのだという。かろうじて逃げ出した生徒や教師の通報によって警察が駆けつけたときには静まり返った校舎の階段でうずくまって眠っていたらしい。これから精神鑑定を行う予定ではあるが、精神状態が普通ではないことは予想がつきますねというコメンテーターの言葉は俺の奇声に消えた。

「和ちゃん？どうしたの、和ちゃん？何かあったの？ねえ、あけて頂戴…和ちゃん？」

外で母親が呼ぶ声や、父親が放っておけと怒鳴る声が聞こえた。が、かまわず身をよじるようにして笑い続ける。

「やった……ついにやったぞ！やっぱり神様は存在していたんだ！俺の復讐は終わったんだ！」  
カーテンで長いこと閉ざされていた窓を開け放つと、朝の強い光と独特の朝露の匂いが流れ込ん

できた。そこに足をかけ、勢いよく両手両足を空に預けて舞う。

ここは二階。一瞬だけ、俺は確実に空を飛んだ。

この世界は匣だ。その中で毎日同じことを繰り返す裏側に狂創という行為が影を潜めている。

キチガイ達が墮ちる夢は、イタクてアマクテタノシイ。

どこかで聞いたことのある歌に目が覚めると、いつの間かベッドを抜け出していた玲奈が歌を口ずさみながら着替えているのが見えた。カナリヤのように美しい声で歌う彼女に、海斗はまだ眠気の残る声で尋ねた。

「帰るのか」

それに玲奈が歌うのをやめて振り返る。

「ええ、帰るわ」

十個も年下の彼女は笑顔でそう言うと、また着替え始めた。その後ろ姿に、口ずさむ歌がまた流れ出す。背中に伸ばしかけた左腕を見て、海斗は苦い気持ちでその腕を引っ込めた。昨夜はずすのを忘れていた結婚指輪が銀色に光っていたからだ。

「別にいいわよ、気にしてないから」

だが、そういう彼女が時折見せる悲しげな表情が切なくて、海斗は会うたびにその指輪をはずすようにしていた。お互い割り切って不倫を続けているが、玲奈には恋人と呼べる人間がいないせいか不倫とはいえど多少本気

で海斗を愛す気持ちがあるのかもしれない。そう思う海斗にしても、自分とそう年の変わらない貞淑な妻よりも二十歳になったばかりの爆発的なエネルギーを持った玲奈に気持ちが移り始めているのは確かだった。

「泊まっていけないか、今日は…」

その海斗の言葉にピアスをつけていた玲奈の手が止まった。が、鏡越しに瞳が会うと彼女は微笑み、

「心にもないこといわないで。明日の朝には奥さん帰ってくるんでしょう？」

そう言って鏡を離れバッグを取った。

「おやすみなさい」

パタンと軽い音を立ててしまったドアの向こうで、彼女が涙を流す声が聞こえた気がした。

いつからこんな気持ちに苛まれるようになったのだろう。サイドテーブルに置かれた煙草をふかし、海斗は小さくため息を吐く。妻を裏切れない弱さと、彼女だけを愛してやりたい気持ちに挟まれながら、そのいたたまれない感覚を楽しむ自分もいる。決して一方通行ではない玲奈から自分への気持ちに、素直に答えてやれないもどかしさだけが強く後悔となって心に積もっていく。

「歌を忘れたカナリヤは…」

玲奈の口ずさんでいた歌を歌ってみる。よく思い出してみればそれは、海斗が彼女に教えてやった古い歌であった。

すべてを捨ててしまいましたかった。  
すべてを否定したかった。  
何もかも忘れてしまいましたかった。

彼を捜して彷徨うくらいなら、この足などないほうがいい。  
彼を求めてしまうくらいなら、この腕なんてないほうがいい。  
目を開けることすら億劫で、重い体を動かすことなどできなくて。  
考えるのも目まぐるしくて、息を吸うことすら忘れて。

彼の言葉を聞きたくなくて、私は耳を塞いだ。  
彼のことを見ると涙がこぼれてきて、私は目を閉じた。  
彼を求めてしまうから、私はこの腕で自分を硬く抱きしめた。  
彼を捜して彷徨ってしまうから、私は足を硬く抱きしめた。

彼が私の全てだった……

だから、こうして動けずに一人忘れられた彫刻のようにここにいる。

何処かに必ず彼はいる。私も変わらず此処にいる。  
いつか誰かが気づいてくれるはず。だから私は此処にいる。  
変わらないんじゃない。変われない。  
ずっとこのままの姿で、私は彼を待ち続ける。  
誰かが彼の訪れを教えてくれるまで。  
彼が変わっていないことを祈りながら。

ずっと長い年月を過ごしながら、私はゆっくりと退化していく。  
深淵に潜む者たちの悲痛な叫び声を聞きながら。  
少しずつ磨り減っていく精神。  
少しずつ蝕まれていく身体……  
やがては私も朽ちるんだろう。  
そして、この深淵に潜む者たちのように闇に全てを飲まれるんだろう。

## 砂上の城

---

もろく、もろく、崩れやすいもの、  
涙がかろうじて、平衡を保つもの。  
いつかは壊れて消えるもの。

雨に濡れれば崩れてしまう　—ならば覆って隠してしまおう。  
風が吹けば倒れてしまう　—ならば覆って隠してしまおう。  
日照りが続けば流れてしまう　—ならば覆って隠してしまおう。

そこには何がある？　—「それ」は誰も「見えない」もの。

多くの人はその城を指差して魔の棲む城と口々に叫ぶ。  
私はその孤城を、期待を持って見つめる。  
本当に魔の棲む城ならば。  
本当に常人が立ち入ることを禁じられているのなら。

私を魔にしてくれますか？  
人から逸脱した存在の意味を、  
この私に教えてくださいか？

砂は時に軽く時に重く、  
時に硬く柔らかく、  
留まり流され、いつかは何処かへ消え行く。  
私の目に映るこの城も、いつかは流され何処か知らないところへ急ぐ。  
ならば今のうちに、全ての意味を捨ててしまおう。  
全て捨ててしまおう。

迷い人？彷徨い人？  
全てを失い、やがて城に堕ちてゆくものたちの呼び名は、

「愛を乞う者たち」  
砂上の城は時を経て、砂塵となって消えてゆく。  
また、どこかで墮ちる兆しを見る私のような人間を求めて。

## アンドロギュノス～seco～

---

かつてギリシャ神話では、男女は一緒の身体を共有し、アンドロギュノスと呼ばれていた。しかし、神に怒りに触れたアンドロギュノスは切り離され、「男」と「女」の二つになった。「男」と「女」はひとつに戻りたがって、今もお互いを求める。

ならば神よ。なぜ「男」と「女」が愛し合うことを禁じた？

ならば神よ。こうなることをわかっていて、なぜアンドロギュノスを二つに分けた？

ならば神よ。なぜ「男」と「女」を創り出した？

ギリシャ語で「seco」。それは「切り離す」という意味を持つ。

「seco」 それは神のたった一つの罪。

「なあ、俺たち……別れないか」

それは唐突な彼の言葉。前からはっきりした人だとは思っていたけれど、ここまで簡単に別れを切り出されるとは思いもよらなかった。

「え？ どういう……こと？」

「お前のほかに、大事に思う人ができた……」

そう言って、彼はその場から立ち去った。

あっけない幕切れ、あっけない彼の言葉。

彼が運命の人だと思った。

最高の恋人だった。

彼ではなかったの。

私の片方は、彼ではなかったの。

今ではぽっかりと何もないその空間を見つめて泣く。

彼ではなかったの。

男にも女にも、必ず「アンドロギュノス」だったころの記憶が遺伝子に刻み込まれているはず

。もとはひとつだった片方を求めて彷徨う。

それが恋であり、愛であり…

そう…彼ではなかったの…

そう…私ではなかったの…

アンドロギュノス。神の唯一の「恐怖」だった生物。

## Singing For The Full Moon

---

思い出のグラスにルビー色のワインを注いで、今宵の満月を浮かべましょう。  
揺れる液体に浮かべた満月は自在にその姿を変えるでしょう。  
美しいそれはまるであなたの散り際のよう。  
二人で傾けたそのグラスは、今は一つしかないけれど私の心を癒してくれるはず。

懐かしいそのグラスに琥珀色のウイスキーを注いで、今宵の上弦の月を浮かべましょう。  
解けた氷に浮かべた上弦の月は氷に姿を歪めるでしょう。  
醜いそれはまるで私の心のよう。  
二人で傾けたそのグラスは、今は一つしかないけれど私の心を変えてくれるはず。

大切なそのグラスに透明なウォッカを注いで、今宵の三日月を浮かべましょう。  
硝子のような液面に浮かべた三日月は壊れてしまいそうに揺れるでしょう。  
儂いそれはまるであなたと私のよう。  
二人で傾けたそのグラスは、今は一つしかないけれど私の心を壊してくれるはず。

あなたがいなくなってから、一体どれほどの月日が経ったのでしょうか。  
月の満ち欠けにあなたと私を重ねながら、毎晩グラスを傾ける。  
歌を歌うように輝く月や星たちを眺め、眠る。

欠けたそのグラスにクリームゾンレッドのあなたの血を注いで、歌う今宵の満月を浮かべましょう。  
滑らかなその液体に浮かべた満月は、歌ってその姿を踊らすでしょう。  
楽しげなそれはまるで生前のあなたのよう。  
二人で傾けたそのグラスは、月のように欠けてしまってもう使い物にならない。

なんだか今日の満月は、歌う姿があなたにとってもよく似ている。

歌いましょう。楽しく、優しく。  
欠けたグラスの破片など、とうの昔に消えてなくなったから。

私はあの月にあなたの面影を重ねて泣く。

## やどりぎの詩。

---

水面を渡るアメンボの群れ。  
それを上に見る、小さな魚たち。  
それを下に見る、私の視線。

全てが全てに等しく、何もない世界に私はいます。

いつの日も、光は私を照らし出します。  
いつの日も、闇は私を隠します。  
雪は銀色に世界を照らし出しました。  
雨は青色に夜を閉ざしました。

そんな世界に私はいます。  
そんな世界に私は生きています。

醜い争いを続ける人間たち。  
それに倒れてゆく罪深い人間たち。  
それでも光は人間たちに降り注ぎます。  
正しい未来が拓けるように。

そんな未来に私はいます。

人間たちは気づいていますか？  
すぐそこに未来があることを。  
「足を滑らせないように、気をつけて進みなさい」  
「過去に落ちないように、気をつけて歩きなさい」  
私の声は聞こえていますか？

自然は時に優しく、時に厳しく叫びます。  
全てが全てに等しい世界に、終止符を打った人間に復讐を。  
万人が平等である世界を、破壊した人間に制裁を。  
自然は怒りに満ちています。世界を破滅に導きます。

そんな過去に私はいます。  
いつか誰かが気づいたときは、もう手遅れです。

誰も私を救えません。誰もが自分を救えぬように。

さあ、あなたならどうしますか？

いったい何を望みますか？

なんでもひとつ、私が願いを叶えてあげましょう。

全てが等しく、全てに同じく……平等であるというのなら。

私はやどりぎ。

私の詩は、あなたたちに届いていますか？

## Prohibition

---

別に、お互いが好き合って付き合ったわけじゃなかった。私はそのとき、フラれたけど本当に好きな人がいたし、言われるまではその存在すらただの「クラスメート」だった。

ただ、付き合い始めてその優しさや楽しさに触れ、自然と彼を好きになっていった。もうこれ以上ないくらい、彼のことばかりを考えていた。

だが。

一年も過ぎたころには、私の気持ちばかりが大きすぎて彼が本当に自分のことを思ってくれているのか不安になるようになっていた。そして、やがてお互い話す話題もなくなり、目をあわすことすら少なくなっていた。私の気持ちは急激に冷めゆき、彼に熱い気持ちをぶつける気力さえ失っていた。

「だって、これから先目指す道も違うだろ？先のことなんて今聞かれてもわからないよ。そのころまで付き合ってもらえるかなんて、そのときになっ

てみないとき」

その言葉は、私の彼への気持ちを凍らせるのには十分すぎた。

そして、今……昔本気で好きになったあの人に似た人が現れた。

その人を好きになってしまうのは当然の成り行きだった。

彼への気持ちが薄らいでいる状態で、その人に気持ちが向くのは早かった。

それは、たとえるならまさに「禁断の果実」

あの痺れるような出会いから半年。まだ彼との付き合いを絶てていない自分がある。

わずらわしい……そう思いつつも、彼を裏切ることのできない自分がある。

今好きな人は誰かと聞かれたら、私はすぐに答えることができるだろう。

しかし、自分を幸せにしてくれるのは誰かと聞かれたら、私の中にその答えはない。

片方は、自分が幸せになるために私を求めているのだろう。もしかしたら、私など置物やステイタスにしか過ぎないのかもしれない。

そして、もう片方は私のこの気持ちにすら気づいていないのだろう。その視線はいつも、違うところに注がれている。

「禁断の果実」に手を伸ばす勇気を、私は彼との馴れ合いの愛の中で忘れてしまった。

とりあえず、今は……現状維持に身を任せて。

向いに座る彼は二十九歳既婚。奥さんは元このオフィスの受付嬢で、綺麗で頭がよくてスタイルもいい。彼より二つ年下。今は妊娠六ヵ月。

彼自身はごく普通のサラリーマン。といっても、営業成績はすこぶる優秀。甘いマスクは女性社員に大人気。もうすぐ昇進もあるらしいと囁かれている。

一方、私はごくごく普通のお茶酌みOL。上司のセクハラに耐えつつ、パソコンとの格闘に明け暮れる毎日。

でも、そんな毎日の中に刺激的な交際があった。

パソコンにEメール受信の文字。誰も見ていないことを確認して開くと、それは向いの彼からのお食事お誘いメールだった。もちろん行きます、と返信してちらりと彼を覗くと、視線こそ上げないけれど口元は微笑していた。

彼と交際して半年。女子社員から「不倫でもいいからお付き合いしたい人」の称号が与えられている彼に不倫のお誘いをされたのは入社間もない

四月の飲み会の帰りのことだった。それから幾度となく密会を続けて今に至る。

「今度の休み、妻がいないんだ。どこか行こうか」

その日の夜、お洒落なレストランバーで食事をしながらの言葉に私は嬉しくてはしゃいだ。彼はそんな私が好きなのだという。たしかに、彼の奥さんならば間違いなくこんな態度はとらないだろう。きっと、すました顔で「いいわね」なんて言うに違いない。比べられている気もするけれど、彼が好きだって言ってくれるなら私はそれだけで十分。

その日は週末の予定を立てて十二時前には別れた。遅くなると奥さんに怪しまれるので、なるべく早い時間に少しだけ会うことにしている。これが二人のルールだ。

お互いの生活を壊さないこと。

二人の絶対のルール。だから、私も彼もそれぞれの生活が中心で、会えるのはその二人の生活サイクルがうまく互いに合った時。私が友人と食事の日は断っても彼は責めないし、私も彼が休日に会えないことを責めたりはしない。

でも、時々ふっと思うことがある。会社ではこんなに近いところにいるのに、彼は彼の生活があって家庭があって時間がある。そこに私が入り込める隙間はほんの少ししかなくて、その間だけ彼は私のものであって私も彼のものだけど決して束縛し合うことはできない。

それを考えるとき、私は寂しくて仕方がなくなる。それは不倫だからしょうがない。電話もできない、側にもいれない、近いようで遠いこの距離を埋めることはできない。

ずっとずっと、側について……

何度も出掛かったその言葉を飲み込み、私は明るく振舞う。彼が私のそういうところを好きだというならそれでいい。

一つため息を吐いて家路に着いた。今度の休みに着る服を、あれこれと頭に思い浮かべながら。



## 最終電車で別れよう

---

田舎の最終電車は時刻が早い。東京辺りなら、この時間だとまだホームは一杯の人で溢れているのだろう。だが、この駅のホームには二人以外に人はいなかった。

「もう、これでさよならだな」

今まで遠距離恋愛を続けてきた忠明と瑞希だったが、お互いに気持ちが冷めあっていることを今回会って話し合い、別れることを決めた。交際三年目に訪れた別れは、人気のないホームで幕を閉じる。

「そう、だね」

二人は数時間前からこうしてベンチに座っていた。その間、何度となく忠明の乗ることができる電車は通り過ぎていったが、なんとなく見過ごして最終電車となってしまった。

二人の沈黙を破るように、遠くから電車の走る音が響いてきた。やがて、ホームに滑り込んできたその電車を見て二人はやっと立ち上がった。

「じゃあな。早く、いい奴見つけろよ」

忠明は荷物を抱え、電車に乗り込んでから冗談っぽく振り返った。瑞希も、

「そっちもね」

と乗降口から少し離れて皮肉っぽく笑って言った。

「……ああ」

停車の一分程度の間、二人は静かに見つめ合った。これが今生の別れなのではない。どうせまた、忠明が帰省した時には顔をあわせることになる。だが、二人にとってこの別れは大きく意味のあるものであった。

出発を知らず案内がホームに流れる。決心を固めたように、忠明が一つ頷く。手を振って、席へ立ち去ろうとした彼の背中に瑞希は呟いた。

「ねえ、私たち、本当にこれで終わりなの？」

え、という忠明の声が閉まるドアの音にかき消される。動き出す電車に駆け寄ろうと顔を上げて、瑞希はその足を止めた。電車の中でこちらに手を振る忠明の表情が、やけにすっきりとしたものだったからだ。そんな表情をさせてしまうほど、彼にとって自分の存在が重荷だったのかと思ひ、瑞希は手を振り返すことができずに立ちすくんでいた。

そして、電車の影も音も無くなって、初めて瑞希は泣いた。思い切り、誰もいないホームで泣き崩れた。

本当は、別れたくなかったという声が忠明に届かないかと思ひながら。

翌年、瑞希の下へ忠明から結婚式の招待状が届いた。が、瑞希はそれを受け取ることができなかった。

二人が別れてすぐ、瑞希は一人最終電車で眠っていたところを駅員によって発見されていた。彼女の手には、空になった薬瓶が握られていたという。

あの駅が見える小高い丘の上に、瑞希の墓はたっていた。

## Scapegoat

---

私の犯した罪を背負って、「君は悪くない」という言葉を囁いて死んだ男。  
恋人を殺した私の罪を、死をもって償うと現世に別れを告げた男。  
でも、私はこの男を愛してはいなかった。男は私を愛していた。

魔女は耳元で囁く。

「お前を裏切った男を殺しなさい」 ーだから私は恋人を殺した。

「お前を愛する男を殺しなさい」 ーでも、彼は自ら死を望んだ。

彼には「スケープゴート」の名がふさわしい。

私の罪を背負った人。彼の冷たくなった身体の横には遺書。そこにはこう書かれていた。

「彼女の恋人を殺したのは俺です」

「ありがとう…」

彼の髪を撫でながら呟いた。初めて彼に触れた瞬間だった。

でも、それでも私の口からは「愛してる」という言葉は出なかった。

私は殺した恋人以外に好きになる人などいなかったから。

ずっとずっと昔、荒野に放たれてどこに行くあてもなく、ただただ惑う一匹のヤギの夢を見た。痩せた身体に寒さをしのげるほどの肉はなく、暑さに耐えうるほどの水分もなかった。そのヤギは、私が見ていることに気づくとまるで笑うかのように一つ鳴いてみせた。それがなんとも悲しげなような、陽気なような、妙に響く不思議な鳴き声だった。そのヤギに近づこうと歩き出すと、そのヤギが人語を話し出す。

「私は人間の罪を背負って、この荒野に放たれました。だから、私はすでにヤギではなく罪です。人間は私に罪という名の穢れを与え、この荒野で朽ちることを命じました。ヤギから罪となった私に名づけられた名は…」

私の口はまるで操られるようにヤギと同じ言葉を発した。

「スケープゴート」

ああ、あの夢はきっと彼の自殺願望を受け取っていたから見た夢なんだと気づくころにはもう彼はいない。

でも、やはり私は彼を愛していたとは言わないだろう。

所詮、彼は荒野に放たれたヤギのように、スケープゴートと名づけられた私の罪なのだから。

罪を愛するほどの墮落はない。

やがては来るこの日。制服を着るのも、これで最後になる。たくさんのことを経験して、吸収して…

私たちはここから別の道を辿っていく。

初めて抱く気持ちだった。

「此処から離れてしまうのは淋しい」

どこか住み慣れた場所を追われてしまうような、そんな感じがした。

心残りがあるわけでもないのに。

小学校の卒業式は、新たな中学校という学習のレールを引かれていた。

中学校の卒業式は、それぞれ違う学校を選んではいつつも、いつでも会える気がしていた。

でも、今は違う。ここを旅立てば、それぞれがそれぞれの道を進む。遠くに離れる人もいる。毎日、いやになるくらい顔を見ていたこの顔が、集

まるのはもうずっと先のこともかもしれない。

私たちはここから別の道を辿っていく。

自分たちの選択肢を求めて。

限りない希望と目標を掲げて。

生徒が去った教室に残されるのは、

華やかに飾られた黒板と静寂。

それと、みんなで過ごした忘れられない思い出。

やがてまたこのときを迎えるために、

教室は新しい生徒たちを迎え入れる。

毎年、毎年、同じようなことが繰り返される場所。

でも、毎年毎年その表情は変わる。

めまぐるしく過ぎる歳月。

同じ場所なのに、違う香りがする場所。

ありがとう、そしてさよなら。

ここで過ごした全てを抱きしめて、

私たちはそれぞれの方向へと歩き出した。

## 午前一時のファミリーレストラン

---

たかが1年の付き合い。そのピリオドがファミリーレストラン。夜中の一時に呼び出されて、何が悲しくて不倫の別れ話なんてしなくちゃならないんだろ？

「二人目の……子供が生まれるんだ。あいつにも君の事を勘付かれ始めてるし、そろそろ……俺たち終わりにしないか…」

一方的過ぎるそれに私はあきれ返って何もいえなかった。でも、どこかで薄々は気づいていた。

『男なんてこんなもんか』

私は何も言わず、冷めた紅茶と申し訳なさげに出されたケーキの代金を相手に押し付けてレストランを出た。

外はうす曇。こんな都会には星が出るわけもなく、いつでも光化学スモッグやらなんやらで空は曇っているが、動くあの影は誰が見ても雲。真夜

中のそれは、光の具合からか泣き出しそうに見えた。

『君が入社したときから好きだった。一目ぼれだった』

そう言い寄ってきた、今頃まだレストランでコーヒーをすすっているだろう彼はそのときすでに結婚二年目で子供もいた。それを知ってて付き合ったのは、刺激のない恋愛に飽きていたから。いつかは必ず終わりを告げるのは、不倫だけじゃなく恋愛の鉄則であることは知っていた。それが恋愛のパターンによって多少変わるだけで、それが死であったり、嫉妬の末であったり、今のようにならかの障害のためであったりするだけだと。

私はケータイのメモリから彼のデータを消去し、そのデータと共に自分の行動範囲や記憶からも彼を消した。

「あーあ」

終わって最初に出た言葉はそれだった。そして思わず失笑さえ出た。

なにやってるんだろ 私

はなから奥さんと別れてほしいだとか、暇なときはそばにいたいとか、高級ホテルのスイートに連れてけとか、そんなことをいう気はなかったし、恋愛にはある程度の距離がほしいほうだったから不倫のほうが性に合っていると思った。なのに。

今どうして自分は泣いているんだろう。

彼がまだいるファミリーレストランの光を背中に受けて泣く私を、少し切なくて情けない女だと思った。

## REMEMBER ME

---

覚えていますか。初めて目を開き、世界というものを見た瞬間を。

覚えていますか。初めて何かに感動したときのことを。

覚えていますか。初めて自分が生きてると実感したときのことを。

覚えていますか。初めて私を感じたときの喜びと悲しみを。

ゆったりと私は過ぎ行き、皆は静かに身を任せて流れてゆきます。

私がいなければ、世界はやがて朽ちて消え行くでしょう。

そう、全ては私の元に成り立っているのです。私が動きを止めれば、何もかも動きを止めるでしょう。

でも悲しいかな、私は動きを止めることができないのです。全てが失われるのを避けるために、私はずっと皆を見守り続けます。

知っていますか。世界は脆く儂く、ふとしたきっかけで滅びることを。

知っていますか。やがて感動に慣れ、素直に受け取められなくなることを。

を。

知っていますか。生きるということがどれだけ苦しいことなのかを。

知っていますか。私が回り続けることが、皆を終わりへ導いていることを。

ああ、お願いします。私を忘れないでください。

私の姿はあってないようなもの。もし、私とその姿を目に見えるものと変えたとき、誰かが私を破壊し、自由に作り直し、全てを作り変えてしまうものが出てきてしまうでしょう。

そう、私は姿を見せられないのです。だから、必ず私の存在を忘れてしまうものが出てきてしまいます。

小さい原子の世界から、強くて弱い人間が作り出されるまでの様を見守った私を。

人間の進む道を時に拓き、時にそれを閉ざし、そこに喜びと絶望をもたらす私を。

儂いから美しいこの惑星の全てを今も見守り続け、そしてこれからもそうしていく私を。

ああ、どうか忘れないでください。

皆が私を忘れたとき、警告が響き世界は混乱に陥るでしょう。

気をつけてください。そこから見える2本の針が逆に回り始めたとき。

私は皆を見捨て、全てを破壊に導きます。

それでも私は消えることができません。

その破壊から生まれる何かを、ずっと見守り続けるのです。

## 人はそれを愛と呼ぶ

---

「もし、私たちが結婚したら……皆びっくりするわね」

そんな君の言葉に頷く。君は知らない。僕には別の恋人がいることを。

「もし私たちが一緒に暮らし始めたらどんな生活かしら」

さあ、どうだろうね。君の言葉に微笑して返す。君は知らない。僕にはもうすでに一緒に暮らしている恋人がいることを。

それでも君に優しく接し、君に夢を見せてあげることが人を愛と呼ぶのだろう。

ある日、約束の無い日に突然彼女の家に行ってみた。彼女は留守で、代わりに出てきたのは彼女とそう歳の変わらないくらいの僕より背の高い男だった。

「ああ、すみません。今息子と買い物に出ているんですよ。急な用件でしたら伝えておきますが」

それに、いえ……とだけ答えると僕はそのマンションを出た。

同じように、彼女も僕を裏切っていたことに少し傷ついていた。

「もし、子供が生まれたらどっちに似るのかしら」

そんな君の言葉に微笑む。君は知らない。僕がすでに、君が誰かの妻であり、母であることを知っていることを。

「どんな名前がいいかしら」

そんな君の言葉に考えて見せる。僕は知らない。彼女の息子の名前を。

思えば、夜にあったことのない僕たちの関係。でもそれをあえて口にせず、彼女の演技に演技で付き合うことを人は愛と呼ぶのだろう。

彼女が突然、僕の部屋を訪れたことがあった。僕は別の恋人と寝室で眠っていて、彼女が鍵の開いていたドアを開けるまで気づかなかった。驚かせるつもりだったのだろう。彼女が静かにリビングに入ってくる気配がした。そして、彼女はそこまで来て引き返していった。リビングのローテーブルには二人分の夜食の残りや二つのワイングラスがそのまま、ソファには二人で昨日の昼見た映画のパンフレットが置きっぱなしになっていたはずだった。

お互いの本当のことを知った瞬間だった。全てが演技であったことを、互いに気づいた朝だった。

それでも演技を続け、くることの無い将来を語り合う僕たちの幸せな日々のことを人は愛と呼ぶのだろう。



歯がゆいくらい恥ずかしい言葉も平気で言ってくれた交際一ヶ月目の夏。

少し落ち着いてきて、お互いのことを理解し始めた交際一年目の夏。

ゆっくりとつむいできた時間が二人をつなぎ始めた二年目の夏。

確実に終わりへと時間を進め始めた三年目の夏。

会う時間も少なくなり、やがて終わるだろう恋に見切りをつけ始めた私は徐々に彼の荷物を片付け始めた。その一つ一つを手に取りながら、蘇ってくる思い出ごと一緒にダンボールに詰める。こんなときばかり、掃除が苦手な私の手はやけに手際よく整理整頓していく。

一体何回目だろう、こうして荷物を詰めるのは。

そんなことを考えながらほとんどの荷物を詰め終わるとそれをロフトの上に収納した。携帯電話を見てみるが、昼に連絡を入れたはずの返事は深

夜になった今になっても返ってこない。

しょうがないな……

心の中で呟くと、携帯電話を取ってメールを入れた。

別れましょう あとで荷物は送っておくから

そんな内容。こんな時間になっても昼の返事が来ないのだから、このメールに返事が来るのは明日の昼過ぎだろう。ロフトに上げた荷物を苦労してまた降ろし、彼の暮らすアパートの住所のメモを手帳から引っ張り出した。

すると、意外にも彼からの着信を知らせる着信が鳴り出した。一つため息を吐き、フローリングの床に放り出してあった携帯電話を取る。

「もしもし？」

「……なんだよ、さっきのメール」

不機嫌な響きの彼の声に、返す私の言葉は自分でぞくりとするほど冷たい。

「そういうこと。これ以上続かないでしょ、私たち」

「……明日会って話そうぜ。電話じゃ納得できねえよ」

「いやよ。どうせ会ったって他の女の匂いさせてくるんでしょ？もうごめんだわ。じゃあね」

待てよ、といいかけた彼の言葉をさえぎるようにして聞こえた女の声。ああ、やっぱり、と携帯電話を閉じた。床に放り投げた彼の住所のメモを取り、宅配便の用紙を出してくると丁寧に住所を書き写し、ダンボールに貼り付けた。これが、彼の恋人として最後の仕事。皮肉な言葉を書き綴った手紙の一枚でも入れればよかったかしらと思い、明日は携帯電話を変えにいこうと決めた。残り少なくなった宅配便の用紙ももらいにいかななくてはならない。

それは、そろそろ夏も終わりの薄寒い夜のことだった。

## マグピ、ナイフ、時々ナミダ

---

彼と別れた。

「性格の不一致」

熟年夫婦の離婚理由みたい。

「どちらかの性格を直さない限り無理」

「俺は合わそうとしたけど限界だった」

何それ？つまりは私が性格直せっての？

ふざけたこといわないでよ。

結局、彼は私と別れたがっていた。

内側を変えることなんて簡単にはできないから、せめて外側だけでも変えてやろうと思った。  
それでも、ピアスをあける勇気も無くてカワイイマグピを少々。

ネエ、ナイフト槍トドッチデ刺サレタイ？

ドウセ気ノ済ムマデ刺サセテモラウカラ、  
ドッチガイイカクライ選バセテアゲル。

選択ノ自由クライ認メテアゲルワ。

手元に転がるは小さなアーミーナイフ。

まずは私以外の誰も見えないように目を刺すの。

彼が最後に見るのは深紅に滲む私の笑顔。

トツテモ素敵デショ？

それから私の名前以外呼べないように喉を刺すの。

「やめてくれ」って叫ぶ声は溢れた血の中に濁って消える。

トツテモゾクゾクスルデショ？

そして私の傍から消えないように足の甲を刺すの。

歩けない彼は私の傍でないと生きてゆけない。

コレデズットズット一緒デショ？

でもなぜそうすることができないの？私の目には涙が溢れるばかり。

それはきっと、彼のことを本気で愛してはいないせいね……

## トランキライザーと夢。

---

毎夜見る夢。きのこの上で、妖精が舞いながら二度と戻れぬ世界へ誘う夢。  
時折見る夢。君が白いカーネーションに包まれて、罪を浄化され消える夢。

白昼夢。君が僕に微笑みかけて、サヨナラと告げて消える夢。

僕はいつからか、トランキライザーが無いと眠れない。

孤独な僕の隣にいるのは、白い錠剤と甘い夢。天井から降り注ぐ月光は、人から離れた僕の心を照らしてくれる。

母であり姉であり恋人であり妻であった彼女を亡くしたあのときから、神は僕に一つの試練を与えた。それは、一人で眠れるようになること。誰かが傍にいないと眠れないのに、彼女が消えた後の僕は一人だった。痛く

て寒くて冷たくて長い夜を、一人眠れず過ごすたびに身を裂かれるような苦しさに泣き出しそうになる。

そして、彼女と出会う前、僕をずっと支えてくれた白い錠剤に助けを求めてしまった。甘くて絶対に僕を裏切らないその錠剤がいないと、もう僕は眠れない。

やっぱり毎夜見る夢。暗い森の中から、僕を誘う不思議な声のする夢。  
時折見る夢。ステンドグラスの美しい教会に、美しい君が横たわる白い棺の夢。

白昼夢。泣きながら微笑む君が、愛していると告げて消える夢。

僕はいつからか、トランキライザーが無いと笑えない。

白い教会。君が僕を裏切って消えた場所。  
美しいステンドグラス。消えた君の魂が吸い込まれた場所。

木製の椅子。君にサヨナラを告げるため、僕が座っていた場所。

僕は君が消えるそのときまで、トランキライザーが無くても生きていた。  
そう、それだけはたしかだった。

トランキライザーの甘い夢を見て、僕は今日も月光の下眠る。  
もう二度と、目覚めることの無い夢を見れることを祈って。

高いところから人間の群れを見るのが好きだ。動く一人ひとりが自分と同じ命を持ってそこに至るまでの思い出や過去を持っているのに、そんなことを気にすることなど無くただ黙々と今流れ去る時間を生きている。その一瞬一瞬をかみ締めている人間が、今見下ろしているこの人間の中にどれくらいいるのだろう。自分は今こんなにも他人のことを考えているのに、見られているとも知らず過ぎていく人の群れは冷たくて尚面白い。

公園でぼんやりしているのも好きだ。自分の前を通り過ぎる人間が、どんな人間でどんな生活をしてきたのかを想像してみる。あのカップルはそろそろ男に別の女ができていころだな、とか犬を散歩しているあの主婦はきっと旦那の留守をいいことに近所の奥様方とあちこち食事に出ているに違いないとか。

ただ、そうしているときの自分は孤独だった。趣味で人間観察をしているのは、そんな孤独な自分が好きだから。そして、皆が皆孤独でないよう

で孤独であることを垣間見ることのできる楽しみを味わってしまったから。

こんなことをはじめたのは、恐らく小学生くらいだったと思う。どこか高いところから望遠鏡で覗いたごった返す町並みが妙に面白いものと感じていた。こんな遠くから覗いている私から見えるビルの一室一室に人がいて、それぞれの人生を送ってきたのだと思うと急に親近感が沸いたのだ。名前もどこに住んでいるかも分からない人間が、この私に見られているとは知らずに孤独な人生の道を歩んでいるのがおかしくて笑った。

今、目の前に泣きはらした目をした女が通り過ぎた。恋人と別れたのだろうか、仕事でも失敗したのだろうか。そんなことを考えているうち、その女は通りすがった男に声をかけられ、そのまま二人で雑踏の中に消えていった。

こうやって、今まで自分は何人も人間の出会いや別れの場面に遭遇し、傍観してきた。他人の何万分の一の確率を傍観して、その先の人生に興味は持たない。彼らにこれから何が起きてどうなるかなどどうでもよかった。ただ、それまでの人生や歳月を思い、今こうして出会う瞬間を見届けるのが楽しい。

行き交う人間の中で誰が自分のことを見ているだろう。私はこれだけ他人を見つめて、その人生に共感しているというのに、見つめ返してくる人間はいない。こみ上げてくる孤独感。それがなんともいえぬ快樂となって、私の心の中に波を作って過ぎ去ってゆく。

「さあて……」

私は吸っていた煙草を放り、ゆっくりと立ち上がってもたれていた金網を後ろ手に押した。ここから先の階段を上ると、ビルの屋上に出るはずだ。高いところから行き交う人間達を見つめながら、空を飛ぶのはどんな気分

だろう。

最後の人間観察に向かうため、私はコンクリートの階段を上り始めた。

でも、一つだけ断っておく。決して、この孤独感に嫌気が差したわけじゃない。むしろ、永遠に孤独になれるだろうことを願って私はこの階段を上っていく。

## 世界の切れ端

---

壁に切り抜かれた、小さな世界の切れ端に憧れた。

朝日のカーテンが引かれ、時折降る雨の雫で世界は美しく姿を変え、稲妻の轟きは神の怒りを思わせた。出ることを許されない部屋の中で、唯一自分以外の移り変わりを教えてくれる小さな世界の切れ端。動き巡る大きな時間の枠にある世界とは比べ物にならないが、その端っこだけでも私にとっては時間の巡りを感じさせてくれる。

そして、その世界の切れ端は……私の死が刻一刻と迫っていることも教えていた。

月の光が部屋中に溢れていた。白から銀色へと姿を変えた無機質な室内が異世界であることを月は教えていた。

気が狂いそうな白一色で統一された室内に、決して開けることの許されない世界の切れ端。でも、それを壊してまで外の世界を見たいとは思わな

かった。そこから見えるものが愛しく、徐々に移り変わるのを見ているだけで十分だった。

この狭い自分だけの空間で、自分だけが世界から取り残されている孤独感。それを、この世界の切れ端は拭い去ってくれる。自分も、世界と共に巡り巡っていることを教えてくれた。そして、全てのものがいかに儚く散り行くものなのかも。

そう、私の命もまた……ふとしたきっかけで壊れてしまうことも。

「また駄目だったのか……」

研究所の室内で少女を抱いて蹲る上条に池澤はそっと呟いた。上条は何度もオリジナルヒューマンの無菌成長を試みているが、そのどれもが幼くして死んでいた。そして、そんな彼女達の死に目に立ち会うたび、上条は池澤に泣きついてきた。彼女達の遺体の処理を頼むために。

「さあ、上条。もういいだろう」

そうやって池澤が後ろから肩を抱いてやると、上条は名残惜しそうに少女の額に頬をこすりつけて腕を離した。白いリノリウムの床に溶け込んでしまいそうなほど白く透き通った肌を持つ、人工的に造られた身体。少女は皆、上条が昔爆発事故で亡くした恋人とよく似ていた。

「池澤……どうして彼女達は僕のことを見てくれないんだ……？皆世界の切れ端に思いを馳せて、やがて衰弱して死んでいく。どうして……どうしてなんだ……？」

世界の切れ端、とはこの無機質な白い壁と床の研究所内に設けられた窓のことで、上条が退屈そうにしていた彼女達のために作ったものだった。同じ細胞から作り出される彼女達は皆その窓のことを世界の切れ端と呼ぶのだという。

「じゃあ、連れてゆくよ」

彼の造った少女を解体するのはこれで何回目だろう。

あまりにも軽い体をした、安らかに眠る少女を抱き、世界の切れ端と呼ばれる窓にすがって泣く上条を少しだけ気の毒に思い部屋を出た。

## Tell me

---

私が訊ねると、彼はいつもこう言った。

「僕が考えるには」

その言葉がなんだかおかしくて、私は色々なことを聞いた。

「生きる、とはどういうこと？」

彼は言う。

「僕が考えるには、生きるというのは自分の意識とは関係なく本能的な生存本能が働いて、一つの固体の命を生かし続けること。例えば、脳は死んでいるが心臓が生きているなら、本能的な生存本能がまだ身体の中に宿っていてその人間を生かそうとしてるから、その人間は死んでいるように生きている」

「じゃあ、死ぬとはどういうこと？」

「僕が考えるには、生命活動といわれるものが全て停止し、本人の意識も

なくなってしまうこと。脳が死んでいても身体が生きているならその人は生きているし、逆に脳が生きていて身体が死んでいてもその人は生きている。僕の考える死とは、脳も身体も死んで本人の意識もなくなっていること」

「じゃあ、脳死は人の死ではないということ？」

「そう。だから、今世の中で論争になっている脳死者からの臓器提供は反対だ。脳死者も身体は必死で動いている。生きようとしている。生きている人間から臓器を奪うのは許せない行為だ。しかも、脳死者のように自己判断が出来ないようになってしまった人からなんて」

じゃあ、今、私から摘出される心臓があなたの中で生きていくことも許せないのかしら。  
一つの身体の中で、私たちが結ばれることも罪深きことだと嘆くのかしら。

彼女が事故死したのと同じくらいに、脳死者からの臓器提供が認められた。僕は反対派だったが、その後受ける心臓移植には承諾をするしかなかった。自分の命を選んだ自分が罪深い人間だと思った。

でも、どうしてだろう？

レシピエントが誰かは絶対に教えてもらえないのがこの世界のルールだが、僕には自然とこの心臓が誰のものかわかった。僕の中で脈打った瞬間、様々な映像が流れ込んだのだ。それは間違いなく、彼女の記憶だった。僕の知らない幼い彼女が僕を見て笑い、成長して僕の前に現れた彼女が言った。

「ねえ、教えて？」

本当に不思議だった。だが、今自分が幸せであることは間違いない。

でなければ、こんなに暖かい涙などこぼさない。

私が訊ねると、彼は必ず全てに答えてくれた。

「ねえ、教えて？幸せってどういうこと？」

「僕が考えるには……こうして君と一つの身体を共有しているということ」

私の微笑みに、彼は涙をこぼした。

## 今宵満月の下で

---

揺らめく青い炎、青白く照らし出される肌、見ていることしか出来ない私を遠くから見下ろす  
紅い満月。

狂気、異質、嫉妬、憎悪……渦巻く何か黒い感情に左右され、胸元に挿した美しい薔薇の花は  
血のような赤色から黒い感情に染められて紫色に変わってゆく。

手の届かない場所にいるあなたは、今宵の満月の下で私の知らない誰かと美しく舞う。

私がこんな気持ちを抱えていることも知らず。

私がこんな苦しみを抱えていることも知らず。

これならいっそ、あなたに殺されてしまいたいと願ってしまう自分がある。

どうしたら、この想いを断ち切ることが出来るのだろう。

あの人へと想いを募らせていくごとに、全てを知る満月は私を照らす。

青白く照らし出された私を見て、あの方は悲しい目をするのだ。

私の隣で何も知らず、何も心配せぬ彼女を見て……。

その彼女への裏切りを強く想う私を青い炎は闇の中に浮き立たせる。まるで、それを許さないとあざ笑うかの  
ように。

悲しみを強く感じるあの人を紅い満月は異形のものへと変えてしまう。まるで、私の罪の表れのように。

これならいっそ、あの人に殺されてしまいたいと願ってしまう自分がある。

あなたが気づかせた恋を、愛を、嫉妬を、憎しみを、悲しみを。

今宵の満月は何も知らずに照らし出すでしょう。

あなたの横に並ぶ自分の姿が見えなくて、私の涙は赤く染まって頬をこぼれていく。

あの方が気づかせた現実を、夢を、未来を、過去を、その過ちを。

今宵の満月は全て知っているかのように照らし出すだろう。

あの人と共に眠る自分の姿がうまく思い描けずに、私の微笑は氷のように冷たく固い。

今宵満月の下で、同じベッドで眠りましょう。

今宵満月の下で、共に並んで闇へと踏み出そう。

互いの想いを口にすることもできず。

互いの想いに気づくこともできず。

今宵もまた、私は満月を見上げてやり場の無い悲しみと想いに泣く。

## 遠く深い龍宮城の彼方まで

---

君が待つ、深海まで泳いでいこう。

そこはきっと光差す青い水より深く、闇に閉ざしたディープブルーの水の彼方に君は微笑んで待っているんだろう。

招かれざる客である僕に、君はその白い手を優しく差し伸べてくれるに違いない。

一体あれからどれほどの月日が経ったのだろう。

太助はゆっくりと手元の手帳を閉じて、それまで落としていた視線を向こうの海へと投げた。眩しいほどの太陽光を浴びて、海面はきらきらと宝石の粒でも撒き散らしたかのように輝いていた。この海のどこかに、太助の婚約者であった琴美は眠っている。

二人がモーターボートで海上へ出ていたとき、別のモーターボートに突

っ込まれて二人のボートが全壊した事故が起きたのはそう昔ではない。その証拠に、白いテーブルに置かれた太助の手の甲から肘にかけては生々しい傷跡が残っている。それだけでなく、全身に残る無数の傷跡はその事故の大きさを物語っていた。

彼女を失ってから太助の中からは年月や時間の感覚はなくなり、こうやって最後に二人で過ごした海岸に建てたコテージで一人海を眺める日々が続いていた。

死んでしまいたい……

何度そう思ったことだろう。しかし、なぜか太助は行動に移すことが出来なかった。

例えたとしたら、そう……琴美が目の前の海から迎えに来てくれる気がして。

太助は自嘲気味に一つため息を吐き、デッキから砂浜へと歩き出した。足の裏には太陽に焼けた熱い砂の感触。波打ち際には白く咲いた泡の花が打ち寄せられていた。だが、太助はお構い無しにその花を踏み散らし、ゆっくりと海に入っていく。

やがて、彼の頭も水没したとき、波音に混じって女の声が聞こえた。

「私は人魚って感じじゃないわ。そうね…龍宮城で浦島太郎を待ちわびる乙姫って感じかしら？」

白いテーブルに残された太助の手帳がぱらぱらと風でめくられ、あるページで止まった。そこには、今日が琴美の誕生日である印がつけられ、その下にはこう書かれていた。

「迎えに行くわ。だって、待ちくたびれてしまったんだもの」

やがて、リュウグウノツカイが長い尾を引いて僕を導いてくれるだろう。

暗い水の中を抜けると、雅やかな龍宮城で乙姫となった君が、待ちくたびれたわと微笑んで僕を迎えてくれるに違いない。

君がそこにいてくれるから、僕はこうして何も見えない深い海の底へと泳いでゆくことができるんだ。

ああ、きっと、今日こそ君に会えると信じて。

僕は深い遠い濁った水の中へと身を委ねた。

## ドロップ

---

胸の傷がひどく痛むでしょう？

こんな雪の日は一人であることを実感してしまうから。

思わず涙がこぼれるでしょう？

静かな夜は悲しい記憶を呼び覚ましてしまうから。

そんなあなたに甘い甘いアメを一粒あげましょう。

ゆっくり眠れるように。甘い夢を見ることができるよう。

深い森の奥へと足を踏み入れる勇気を。

暗い水の中へ身体を沈める決意を。

甘いアメ玉にたくさん詰めてあげましょう。

一人で泣いては駄目よ。

一人で抱えこんでは駄目よ。

それはあなたに優しく囁くでしょう。

「小さくても深く心を包み込む優しい香り。

一時の幸せをくれる優しい味。

やがてそれは溶けてなくなってしまうことを知っているから、  
大切にしているうちにどこかへ落として無くしてしまった。」

そんなあなたに新しいアメをあげましょう。

今度は無くさないように。

すぐに口に含んでしまいたくなるような、好きな味を選ぶといいでしょう。

また一時の甘い夢を見せてあげる。

胸の傷がひどく痛むでしょう？

思わず涙がこぼれるでしょう？

それはきっと、苦くて悲しい味を残すアメだったから。

次こそ、甘い香りだけを残して溶けるそれを求めて。

さあ、手に取りなさい。

好きなLOVE DROPを。

きっとそれは、あなたを待っているから。

## 崩-HOUKAI-壊

---

ブラックネオン、奇怪な笑い声、人の仮面を付けた野獣の群れ、喧騒・破壊。

面白くも無い日常ドラマ。

見飽きた街の崩壊が始まる。

やがて、天使だと思い込んでいたそれらは黒い翼で降り立ち微笑む。

「その仮面を外し、己の本質を曝け出せ」

野獣の本性を剥き出しにした奴らの狂宴が始まり、街は崩壊してゆく。

少しでも理性が保てた奴でも、街の崩壊に悲観して自ら死にゆく哀れな末路。

悲しい運命の子供達は、この街に生まれたことを嘆くだろうか。

悲しい運命を背負わせた野獣たちは、醜い争いに疲れて子供達の嘆きには気づくまい。

そんな未来が地下で蠢く、この街の崩壊は近い。

いつ頃からだったろう。こんなビジョンが見えるようになったのは。

トキオは煙草をふかしてため息を吐く。この街に重なるようにして見える奇妙な映像。

それは、未来の街の地獄絵図。たくさんの人間が死に、争いは争いを呼び、災いは雨の如く降り注ぐ。

だが、トキオはあえてそれを口にし、それを人に伝えていこうとはしなかった。

その崩壊どおりになれば、それまでの退屈な時間は消え、人間は滅び、世界の全ての基準が狂う。トキオにとってそれは、いわば一つの退屈しのぎになるわけで、その争いに巻き込まれて死んでしまっても良いと思っていた。かったるい世の中に染まるのが嫌で、こうして毎日人の群れを見てはため息を吐くばかりなのだから。

「ねえ、君。もしかして、見えるの？」

ふと、男の声がして顔を上げると、まだ7、8歳の子供が立っていた。

「見えるの？」

だが、その声は確かに成人した男の太い声である。

「前兆か？」

トキオがそう尋ねると、その子供は笑った。

「逃げたほうがいい。君はここで死ぬには惜しい人間なようだから」

ゴウツという爆発風が吹き、気づくとトキオは街の外にいた。考えずとも、あの風で吹き飛ばされたことぐらいはわかった。

ぼんやりと顔を上げると、向こうには今まさに沈まんとしている太陽。

しかし、その夕陽の色は、禍々しいほどに紫色で、街を永遠の夜へ葬ろうとしているかのようだった。

これから起こらんとする出来事に胸騒ぎがするのはきっと、

これから先訪れる街の先々で同じビジョンを見る予感も混じっているに違いない。



光沢を帯びてきたチョコレートをゴムベラで混ぜながらふと思った。

「来年は誰にこうやってチョコレートを作っているんだろう？」

それは昨年と同じ疑問。一笑にふして、丸めてあった柔らかいチョコレートをコーティング用のチョコレートの中に落としてまんべんなくまぶし、余計なチョコレートを少し落とすと皿に転がした。一度こうやってコーティングして、さらにもう一度コーティングをしてからトッピングの白い粉の上に転がして完成。

我ながら、なかなかの出来栄えに感心して胸を張ってみる。

これもやっぱり去年と同じ行動。

年々、この日を重ねるごとにトリュフの作り方は上達しているらしかった。

あげる相手は毎度変わっているので、それに気づく者は恐らく自分しかいないが。

でも、センターの柔らかさや味も調節できるようになってきたし、テン

パリングのコツもつかめてきた。ラッピングだってこだわっているし、同じようなラッピングはしない。

完璧だった。

出来上がったチョコレートを綺麗に詰めて、ラッピングしてお洒落な袋へ。

これであとは渡すだけ。きっと、喜んでくれるだろう。

「あ？なんだ、コレ……」

ロッカーを開けると、いつの間にやら見慣れない小さな袋が置いてあった。和幸がまじまじとそれを見つめていると、隣にいた弘がにやけた顔で覗き込んできた。

「お、何だよ。彼女からのチョコレートか？」

「え？あ、ああ、バレンタインか、今日……」

「おいおい、忘れてんのかよ。いいな、くれる彼女がいる奴は」

「ははは、お前も後輩で探せよ」

「そうだな。じゃ、お先」

先に更衣室を出た弘に手を振り、そういえばバレンタインかともう一度小さく呟いて袋を開けた。可愛らしいラッピング。待ちきれずそれをあけると、洒落た箱の中に四つ、白い粉砂糖かなにかをまぶしたトリュフが入っていた。

「うまそう！」

一粒つまんで口に放り込むと、ふわっと洋酒の味がし、甘い味が広がった。

気がしたただけだった。

「んっ？うぐっ……！」

焼けるような喉と胃の痛み。目の奥が引きつり、声にならない叫びが喉からほとぼしった。激しく胸を打つ鼓動、めまぐるしく反転した世界。ちかちかとネオンが光っているような、妙な光がスパークする。

そんな中で、和幸は今日、彼女がバイトの休みであったことを思い出した。そして、メールで夜会う約束をしていたことも。

揺らぐ視界の中に、ちらりと見えた人影は同じバイトの陰気臭い女だった。その女は満足げに、もがく和幸を見下ろして笑っていた。

「どう？おいしい？私、あなたのことがずっと好きだったのよ…これで、私だけのものになったわね…」

最後に何か言いかけた和幸の口は、大きく開かれたまま言葉を発することは無かった。

## イタイ距離

---

いっそ、姿さえ見えなければこんなに苦しむことなんてないのに。  
だからといって、それ以上この距離が縮むわけもなくて。  
こんなに近くにいるのに、私の心だけがあの人のことを追う。  
あの人の心は一体誰を想うのだろう。  
そんなことを思って、諦めと悲しみの苦笑を漏らす。

「遊んでるの？」 「やめたほうがいいよ」  
ウン、私モソウ思ウー  
だからといって、すぐに諦めがつくほど簡単じゃなくて。

「もしかして、好きでいてくれるのかな」  
淡イ期待ハ私ヲ苦シメルー  
なのに、そう思っているだけで救われるわがままな自分の心に苦笑。

久しぶりの恋心。  
今まで叶うことの無かったそれ。  
今度こそ。  
そんな決意は冷たい、なんでもない態度に裏切られて。  
きっと好きな人がいるんだろう。  
愛している人がいるんだろう。  
私なんて眼中にないだろう。

自分の心を自分で傷つけるということは、  
どうしてこんなに辛いんだろう。

姿を見ることが出来る距離。  
声を聞くことができる距離。  
話すことが出来る距離。

好きになることが出来る距離。  
悲しい結果を招くだろう距離。  
臆病な自分に気づく距離。

とてもとてとも、イタイ距離。

## Persecution Complex

---

孤独に慣れてから一体どれくらいのときが経った？

初めて人を信じられないと思ったのはいくつのときだった？

あれから私は、誰からも必要とされず、行く先々で邪魔にされ、笑われ、けなされ……

そんな被害妄想を抱くようになった。

人間の笑顔信じられなくなったのは一体いつのことだった？

その笑顔の仮面の下に、嘲りの笑みを見るようになったのはいつ頃だった？

あれから私は自分以外の人間を見ることができず、信じることが出来ず、孤独で……

そんな被害妄想にしがみつくようになった。

こうなる前は皆と変わらない普通の人間だったはずなのに。

妄想なんか頼らなくとも、素直に生きていけた人間だったのに。

誰が私をこう変えた？誰が私を裏切った？誰が私を嘲り笑った？

私を取り囲む人間達の誰かが、その答えを知っているはず。

私の笑顔はぎこちない。

私の言葉はうそ臭い。

私の喜びは悲しみの表情に近い。

全ては信じることを忘れたせいだ。

「一人」になるのが怖いのに、誰からも相手にされないで。

ほら、今も私を笑っているのでしょうか。

ほら、今も私をけなしているのでしょうか。

ほら、今も私を……

被害妄想の塊。

どうしてここまで妄想が激しくなったのか。

そうでもしなければ気が狂いそうだったから。

ほら、発狂という言葉に泣きそうになる。今にも死ねそうな気がする。

バイクで走る。頬を冷たい風が撫ぜる。

夕方に染まる空が、視界の中で滲んでいく。

事故でぐしゃってつぶされてしまえ。私なんて、消えてなくなっしまえ。

淀んだ空が滲んだのはきっと、被害妄想に疲れた私の流した涙のせいだ。

世にも醜い私の姿。

お願いだから立ち止まらないで。

私のこんな姿を見て、あなたたちはきっと笑うのでしょうか？

私はなんで生まれてきたんだろう。

可愛い可愛い乳飲み子ちゃん。

あなただけは私を見て可愛いと喜んでくれるのね。

こんな醜い私を見て、微笑んで喜んでくれるのね。

でもきっと、いつか私に近づいてはいけないと教わるわ。

それまでゆっくりお休みなさい。

ひと時の幸せをありがとう。

さげすみを知らぬうちはいいわ。

憎しみを知らぬうちはいいわ。

嘲笑を知らぬうちはいいわ。

やがて可愛い乳飲み子ちゃんも、私を醜いと指差し、さげすみの瞳で笑うでしょう。

ああ、でもやっこのときが来た。

産まれて初めて、私の疑問が問われる日。

どうかどうか、私の生きてきた意味を教えてください。

どうかどうか、私の生まれてきた意味を教えてください。

醜い私のために用意されたバージンロード。

ここを歩いた先に、なにが待っているのか知らないけれど。

でもきっと、私の存在してきた意味は、私の生まれてきた意味は、その先にあるのだという気がしているのです。

一瞬でいいのです。私を綺麗だと思ってください。

肉塊はやがて、あの乳飲み子ちゃんの糧となり、骨となり、血となり、肉となる日が必ずやってくるのだから。

汚い私を思い、  
醜い私を思い、  
その肉塊を口に運ぶことは悲しいから……

口に入れる、一瞬だけでいいのです。私を綺麗だったと褒めてください。

## 情緒ニ欠ケテ月ガ嗤フ

---

御覧下サイマセ。アレガ笑フ紅イ月。  
何ヲ可笑シイト笑フノデショウ。  
狂気ハ如何ト兎サンガ踊ッテイルワ。  
時計ノ針ハ逆回り。  
太陽ガ蒼ザメルノヲ見テ、月ガマタ笑ッテイルデショウ。

発狂寸前、狂嫉乱舞。  
爆発間近、鎮魂絶叫。

死ンデシマエト仰ルノナラ、コノ首絞メテミタラ如何？  
泣イテシマエト仰ルノナラ、コノ目穿ッテミタラ如何？  
情緒ナンテ欠片モ御座イマセンノヨ。  
ソナナ世界ノ中心デ、私ニ泣ケト仰ルノ？  
ナンテ馬鹿ナ御願イ。

裏切必至、崩壊寸前。  
怒号狂爛、殺人嬌声。

殺シテ下サイ。其ノ清ラカナ御手ヲ使ッテ。  
殺メテ嗤ッテ捨テテシマッテ悦イノデス。  
脳味噌穿ッたら御月様ニアゲルノ。  
目玉穿ッたら地獄ノ釜ニ放り込ンデアゲルノ。

ホラホラ、ソノ御手ヲ拝借。  
嗤フ満月ヲ貸シ切ッテ醜イ饗宴ヲ始メマシヨ。

笑フ、咲フ、嗤フ月。  
情緒モ無ケレバ夢モ無イ、愛モ無イ。  
嗤ッテ、御月様。コノ奇妙ナ世ノ中ヲ。  
打ち捨テラレタ私ノ、穿ラレタ脳味噌モクレテヤルワ。  
地獄ノ釜ニ捨テルハズダッタ、泣ケナイ瞳モツイデニ如何？  
泣ケナイ世界ノ為ニ、ドウカ御月様大キナ声デ嗤ッテ頂戴。  
コノ惑星ヲ壊シテシマウクライ特大ノ笑イデ。  
ブツ壊レテシマエバイインダワ。コンナ面白ミモ無イ世界。  
クソ真面目ナアイツヲ殺ッチャッテヨ、御月様。

御覧下サイマセ。アレガ笑フ紅イ月。

情緒ニ欠ケタコノ世界ヲ壊ス、サディスティックナ嗤フ月。

## まいくろぐらふ

---

生々しいですね。どう見たって私には不揃いな連中が集まってるだけに見えるんですが、それが未来への近道だって言うんだから。

せせこましいシャーレン中で増えちゃった細菌が、硝子ぶち破って外に出ようと作戦立ててるように感じられるのは私だけですか。

その先には暖かい培地も、育ててくれるはずの栄養素も無いんですよ。

自己順化なんてできるほど、たくましい連中でもあるまいし。

頭でっかちなミクロな住人が、ひそひそと話し合う声が聞こえてきそうです。

「ねえ、君、お茶」

「いい体してるじゃないの」

「またこれやり直し」

それしか言えないような連中が、頭つき合わせて増える準備をしてるんです。

新たな未来の為ですか？自らの発展の為ですか？

いえいえ、それは。

幻覚細胞が神格細胞へと姿を変えるための器を作る為。

世界の核となるために、小さな声は朝から晩まで培地を震わせ話し続けるんです。

馬鹿馬鹿しいですね。ピペットで吸い取った絶望の一滴でも垂らしてやったら大変な騒ぎになるんでしょう？

でも、どうせ死んだり増えたりの繰り返しなら、暖かい培養室で優しく育てられた細菌にはカビなり虫なりの殺し屋を送り込みましょうよ。そうしたらちよつとはマシになるんじゃないですか？

ぬくぬく育った試験管生まれのエリートよりも、地面育ちの頑強な連中の方が根性あるってmondesho。世界の切り抜け方だって、培地しか知らない連中よりも長けているとは思いませんか。

小さな世界の核となる為に、ミクロな住人は今日も忙しく培地を震わせています。

馬鹿馬鹿しいくらい小さな世界を予定に描いているのにも気づかずに。

マイクログラフ。

世界の記録を残すため、どこかに保管されている顕微鏡写真。

ほら今日も。

こうやって、私が彼らを馬鹿にする様子も撮って残しているんでしょう？

何の目的で、そんなものを撮っているのかは知りませんが。

むしろ知ったところでなにをするってわけでもないの、あえて知りたいとも言いません。

ほら、明日も。

彼らと似たり寄ったりの、アンバランスな丸底フラスコに棲む私を覗き込むんでしょう。  
彼らを馬鹿にする私のことも、マイクログラフにおさめているのでしょうか？

彼らと私が違うのは。

平面という無限のバランスを持つところに棲んでいるのか、丸という逃げ場の無いアンバランスな世界に住むのかという違い。

彼らと私が決定的に違うのは。

外に出るため産まれたときから試験管で育ててられているのか、外から連れてこられて増えるためにフラスコに放り込まれたのかという違い。

私は二度と、フラスコの外に出ることは無い。